

# 藤原義孝と修理大夫惟正

——『義孝集』読解考——

妹 尾 好 信

はじめに

藤原義孝(天曆八年(九五四)——天延二年(九七四))の家集『義孝集』の冒頭は、諸本ともに、修理大夫源惟正との贈答から始まる。惟正との贈答は他にも二箇所にあつて、『義孝集』の中では、修理大夫惟正はちよつと目立つ存在になつてゐる。

稻賀敬二先生は、これら義孝と惟正との贈答歌を子細に検討され、義孝と惟正の娘との結婚問題の経緯などを考えながら、惟正を『義孝集』の成立にも関わる重要人物であるとされた(『義孝集の編纂者』あるいは構成意図をめぐる断想——源惟正と義孝——)、『王朝細流抄』第一集(平8・10)。非常に興味深い御説であるが、『義孝集』本文の読解に若干の異見もあるので、先生の御論の驥尾に付して、私なりの読み取りを提示してみたいと思う。

## 一 枕の包み紙に書いた歌

『義孝集』冒頭の一連の贈答歌は、次のごとくである(『義孝集』の引用は、『私家集大成』中古1(昭48 明治書院)に翻刻された九州大学蔵細川文庫本により、適宜濁点を補つた。以下同じ)。

源修理のかみ<sup>み</sup>のいへに、かたゝがへにいきてあるに、まくらいだしたるつゝみがみに

つらからばひとにかたらむしきたへの まくらかはしてひとよ  
ねにきと(一)

返し

あぢぎなやたびのやどりをくさまくら かりならずとてさだめ  
たりとか(二)

あかずおぼえしかば、人に、かくなんありし、これが返事  
せよといひしかば、かくはいかゞとて

かたるともたがなはたゝじながゝらぬ こゝろのほどや人にし  
られん(三)

源修理大夫惟正の家に方違えに行つていた時、惟正の方から枕を出してきた。翌朝それを返す時に、義孝は包み紙に歌を書き付けた。一番歌の詞書の書き方では、あたかも惟正が義孝に枕をさし出した時にその包み紙に書き付けてあつたように読めるが、そうではなくて、返す際に義孝が書き付けたものと考えられる。高橋正治氏のいわゆる第二類系統本(宮内庁書陵部蔵一五〇・五七六および一五〇・五七七)では、「まくらをいたしたるかへすとてつゝみたるかみに」とある(『新典社校本叢書1『校本藤原義孝集目録』昭62 新典

社)。細川文庫本などの第一類系統本では「かへすとて」が落ちたのである(一番歌を所収する『拾遺集』巻九・雑上・四四九の詞書にも「つとめてかへるとてかきつけ侍りける」とある)。これと似たような状況で詠まれた歌としては、『和泉式部集』に、

公資がめともろともきて、まくらこへば、いだしたるに、  
かへすとてかきつけてかへしたる

たびごとにかるもうるさしくさ枕たまくらならばかへさざらまし(五二二)

かへし

草枕そのむすびめのたよりにはちたびも千たびかさんとぞ思ふ(五二三)

という贈答がある(『新編国歌大観』による)。以下、『義孝集』以外の歌書の引用はすべて同書による)。「たびごと」の歌は『続詞花集』巻十七・雑中・八〇九にも載り、詞書は、「和泉式部が家につねにかたがへにまかりけるに、いだしたる枕をあしたにかへすとてかきける」とあって、『義孝集』の詠作状況により近くなる。

「つゝみがみ」とは枕を包んだ紙のことで、例えば、鎌倉期のものだが、『三条中山口伝』(『続群書類従』第三三輯上所収)に、「御枕事 其體尋常定也、以薄様二可裏之」とあるように、枕は紙に包んで置かれるものであったようである。その紙に義孝は歌を書き付けたのである。

さてその歌は、「あなたがそんなに冷たくするのなら、人に語り

ますよ。あなたと私とは枕を共にして一晩寝た仲だとね」という意である。枕を貸してくれただけで共寝を許してくれなかったことを冷淡だと恨んだ趣である。これは惟正に向けて詠まれた歌だが、詠みぶりは全く恋歌である。当時の風流人がよくやったことで、義孝はわざと惟正に恋歌めかした歌を詠みかけて、どのように返歌するかを試したのである。すると、惟正は、「無茶苦茶ですね。所詮旅の宿りですので、あなたはかりそめではないと言って、ここを通い所に決めたとてもおっしゃるのですか」と、女の立場で、男の誠実に不審感を表明して見せた。

これはこれで、義孝歌の恨み言に切り返した歌としてよく出来ているかに思えるが、義孝はこの惟正の返歌には満足しなかった。そこで、別の人に、「このように詠んだのだが、これに返事をしてみなさい」と一番歌を示して返歌を求めた。するとその人は、「これではいかがですか」と言って、「たとえあなたが人に語ったとしても、あなた以外の誰の評判が立ったりしませう。あなたの悪評が立っただけですよ。長続きしない浮気な心のほどが人に知られることになるのではないですか」と、義孝の歌の「人にかたらむ」という脅し文句にひるまずに見事にやり返した歌を詠んだ。毅然とした詠みぶりは確かに惟正の歌よりも数段すぐれているようだ。義孝の反応は書かれていないが、きっとこの返歌には満足したことだろう。この人が誰かはわからない。この歌を載せる『続詞花集』巻十七・雑中・八一〇にも「よみ人しらず」とあるだけである。もしかしたら、

この人は男ではなく本物の女性なのではないかという気がする。

ひとつの歌について、複数の人に返歌を求めた事例としては、例えば『元良親王集』の冒頭などに先例がある。これもいかにも風流人らしい遊戯的な行為である。

## 二 源惟正という人物

ところで、このやりとりでは惟正はあまりうまく返歌できなかったというばつとしない役割になつているが、方違えに行つて、借りた枕を返す時に恋歌めかした歌を詠んで返歌を楽しむというような、二人の気のおけない仲が窺える。義孝にとつて、源惟正とはいかなる人物だったのであろうか。

源惟正は、文徳源氏、右大臣能有の曾孫で、中納言当時の孫、右大弁相職の男、母も同じ文徳源氏で、能有の孫、大蔵大輔当年の娘である（『尊卑分脈』）。従三位・参議に至る。天元三年（九八〇）四月二十九日薨。『公卿補任』（九条家本）天元三年条には、「生年延喜六年戊子」とあり、これによると、九〇六年生まれ、享年は七十六ということになる。ところが、同じ『公卿補任』の天延二年（九七四）条には、惟正の年齢を「四十六」と記している。これによれば、延長七年（九二九）生まれ、享年五十二となる（『尊卑分脈』にも享年を五十二としてゐる）。惟正の父相職は、天慶六年（九四三）四月九日に四十三才で没している（『一代要記』『職事補任』『尊卑分脈』）から、延喜元年（九〇一）生まれである。その子の惟正が延喜

六年（九〇六）生まれということはあるまいので、延長七年生まれというのが正しいのだろう。

『公卿補任』の閏歴によれば、惟正が修理大夫になつたのは、天禄三年（九七二）閏二月二十九日だが、翌四年七月二十六日には息子の惟章に官職を望んで一旦辞している。その後、天延三年（九七五）に復任したらしく、以後、薨去まで修理大夫の職にあつた。義孝は天延二年（九七四）九月十六日に没する（『中古歌仙三十六人伝』他）。従つて、『義孝集』冒頭の贈答が交わされたのは、天禄三年（九七二）閏二月二十九日から翌年七月二十六日までの間のことということになる。後述のごとく、『義孝集』では、六番歌以降に父伊尹の薨去前後の歌が続き、この辺りは概ね年代順の配列になつてゐるように思われるので、この贈答歌の内容の明るさから見ても伊尹薨去前のことのようにである。すると、天禄三年（九七二）の三月以後で、十月初め頃に伊尹が病に臥す以前のことと考えられよう。

この年、義孝は十九歳、惟正は四十四歳、すなわち、惟正は義孝より二十五歳の年長である。方違えに行つて気楽に歌を詠み交わしているけれども、実は二人は親子ほどの年齢差があるのである。従つて、惟正は義孝よりもむしろ父伊尹と同世代と言つてよい。天曆九年（九五五）から翌十年初めにかけて、藏人頭伊尹の下で惟正は六位の藏人を勤めたこともある（『藏人補任』）。安和二年（九六九）十一月十一日から天延二年（九七四）四月七日まで惟正は春宮亮を勤めたが、この時の春宮は伊尹の娘懷子を母とする師貞親王（花山天皇）

である。伊尹の信任がいかに篤かったかが知られよう。

おそらく惟正は、一条摂政家に親しく出入りしてその庇護を受けていたであろう。ちょうど、『源氏物語』笹木の巻で、光源氏が方違えのため邸に行つて空蟬を見出すことになつた紀伊守のような存在だつたのではなからうか。紀伊守は、『岷江入楚』には「源氏の家人也」とあるが、左大臣家の輩下（『日本古典文学全集』『源氏物語』頭注）であり、家司（上家司）であろう（『新日本古典文学大系』『源氏物語』脚注）と言われる。惟正も一条摂政家の家司であつたのかも知れない。

ちなみに、惟正の家は二条にあつたことが、『日本紀略』寛和元年（九八五）九月十九日条に、「中宮<sup>源子</sup>移御故参議源惟正卿二條家」（『新編 国史大系』による）とあることによつて知られる。

### 三 伊尹中陰明けの日の贈答

義孝と惟正との親昵ぶりは、先の方違えの時の歌よりも、伊尹薨去後に交わされた贈答によつてよく知られている。『義孝集』では、先の三首の歌に続いて、「秋のゆふぐれ」と詞書する歌を二首と、伊尹の病気を見舞つた人に贈つた歌を一首載せ、次に伊尹薨去後の歌が並ぶ。その初めに次のような贈答が載る。

うせさせ給にし御いみはてゝ、人ぐにおはしわかるゝひ

イハ、イハ、イハ、イハ、

いまはとてとびわかるめるむらどりの ふるすにひとりながむ

べきかな（七）

修理かみ返し

はねならぶとりとなりてはちぎるとも きみわすれずはうれし  
とぞおもふ（八）

父伊尹が亡くなつて、その中陰が明け、寺に籠つていた人々と別れた日に、義孝から修理大夫惟正に歌が贈られた。今はこれと言つて飛び別れて行く群鳥と一緒に住んでいたこの古巣に、これから私一人もの思いにふけりつつ暮らすことになるのだなあ、と言つている。それに対する惟正の返歌は、第三句目は傍書のごとく「わかるとも」でないという意味がとれないので、それによると、あなたは、いったん比翼の鳥となつたのだから、たとえここで別れても、あなたが私のことを忘れないならば嬉しく思います（末句、傍書によれば、「私もあなたのことを忘れません」の意）という意にならうか。「はねならぶとり」とは、もちろん「長恨歌」の「天に在りては願はくは比翼の鳥と作り」云々による表現で、男女間の愛情のこまやかなことを言う言葉である。この惟正の歌もまた、恋愛歌めかしたおおげさな歌で、中陰明けの歌としてはやや不謹慎な感さえるほどである。これもまた、二人の親密さゆえ許される言い方なのであらう。

義孝の贈歌は、集付にあるように『後拾遺集』に載る。卷十・哀傷・五六七に、

一条摂政みまかりてのちのわざのことなどはててひとびと

ちりちりになりはべりければ 少将藤原義孝

いまはとてとびわかるめるむらどりのふるすにひとりながむべきかな

とあって、詞書の内容や歌句に相違はない。また、贈答としては、

『栄花物語』巻二・「花山たづぬる中納言」に、

かくて御忌のほど、何ごともあはれにて過くさせたまひつ。

御法事などあべいかぎりにて過ぎぬ。今はとて人々まかづるに、

義孝の少将の詠みたまふ、

今はとてとび別れぬる群鳥の古巣にひとりながむべきかな

修理大夫惟正返し、

翼はならぶ鳥となりては契るとも人忘れずはかれじとぞ思ふ

(引用は『新編日本古典文学全集』『栄花物語』による。以下同じ)

『義孝集』と比べて、惟正の歌は歌句にかなりの異同がある。第三句「契るとも」は、諸本異同がないようだが(松村博司氏『栄花物語全注釈』第一巻の「校異」による)、やはり「別るとも」の誤りと考えないと意味がとれない。下の句は、「人」はこの場合「君」と同意で、もしあなたが私のことを忘れなければ、私も(今はいったんは別れるけれども)決してあなたから離れまいと思えます、という意となる。『義孝集』のような歌形のひとつの異伝である。

伊尹の四十九日の法要は、『日本紀略』によれば、天禄三年(九七二)十二月十七日に法性寺で行われた。この日まで惟正は義孝らとともに法性寺に籠っていたのだが、忌みが明けて帰宅することに

なつたのである。できるならこのまま義孝らと一緒に籠っていたのだが、そうもいかないのでここで別れるけれども、これで縁が尽きたわけではない。あなたが忘れなくてくれさえすれば、自分も決して忘れまいし、これまで通りのお付き合いをしたいものです、と言う惟正の歌は、亡き伊尹追慕の情とともに、その息義孝への親愛ぶりがよく表れている。義孝も惟正を心から慕い信頼していたからこそ、特に歌を贈ったのであろう。『義孝集』冒頭の贈答とともに、二人の親密さを如実に語る記事だと言えよう。

ところで、先に引用した『義孝集』には、義孝の歌の詞書の末尾に、異文注記として「この、中將のもとへ」と記されている。この部分、第一類系統本のうち、榊原本・清泉女子大学所蔵阿波国文庫旧蔵本・京都大学所蔵本では詞書の本文に続けて同じ大きさで記され、うち京大本には「イ」の字がないという(田坂憲二・田坂順子氏『藤原義孝集 本文・索引と研究』(昭62 和泉書院)による)。もしこの記事が信用できるものとすれば、「この、中將」という呼称が何を意味するのか気になるところである。

「この、中將」は義孝が歌を贈った相手をさすから、返歌の作者である「修理かみ(これたゞ)」のことであるとまずは見なければなるまい。すると、惟正は「殿の中將」とも呼ばれていたということになる。『公卿補任』の記す閏歴によると、惟正は天禄元年(九七〇)九月二十日に右中將になっている。いつまで右中將だったかは明らかでないが、おそらく天延二年(九七四)二月七日の任参議までであろうと

思われる（市川久氏編『近衛府補任』第一（平4 統群書類従完成会）は、天延元年七月二十六日に辞したとするが、この時は「辞大夫」とあるので、修理大夫を辞したと見るべきである）ので、この歌が詠まれた天禄三年（九七二）十二月現在には中将であつたと見てよいと思う。ちなみに、義孝は天禄二年（九七一）七月五日に右少将に任じており、以後、同じ右近衛府の上司と部下の関係にあつた。

惟正は右中将であつたから「中将」と呼ばれるのはわかるが、何故「殿の中将」と呼ばれるのであろうか。『義孝集』で「殿」と呼ばれるのは、義孝の父である伊尹である。その「殿」を冠して「殿の中将」と呼ばれる場合は、伊尹の息子である中将という意になるのが普通である。例えば『源氏物語』では、夕霧が「殿の中将」また「殿の中将の君」と呼ばれている（胡蝶の巻）。六条院の主人であり太政大臣である光源氏の子息としての呼称である。また『榮花物語』では、道長の子息頼通が「殿の三位殿」（巻八「初花」）、同じく教通が「殿の少将君」「殿の権中将」（同）、長家が「殿の中納言」と呼ばれ（巻三十「鶴の林」）、頼通の子息通房が「殿の中将」「殿の大納言」（巻三十四「暮待つ星」）、頼通の子師実の子息師通が「殿の三位中将」「殿の大將殿」などと呼ばれている巻三十九「布引の滝」のように、道長とその直系の子孫たちの子息をさす表現として「殿の」式の呼称が用いられている。これらに倣えば、「殿の中将」とは、伊尹の子息という意でなければならぬ。しかるに、ここは源惟正をさすことは間違いないのである。

すると、惟正は伊尹の子息ということにならざるを得ない。ということはずなわち、惟正は伊尹の猶子であつたということになるのではなからうか。先に惟正は一条摂政家の家司だつたのではないかと推定したが、それどころか惟正は伊尹の猶子として子息に準じる扱いを受けていたのであつて、それ故に「殿の中将」という呼称が成り立ち得たと考えられるのである。そうであれば義孝と惟正は義理の兄弟ということになるから、その親密ぶりも当然で、とりわけ伊尹の中陰明けの際の歌に「はねならぶ」となりては」と惟正が詠んだのも、実は義孝と義兄弟の契りを結んだことを言つたものと考えられるわけである。

一条摂政伊尹は延長二年（九二四）の生まれであり、延長七年（九二九）生まれの惟正とは五歳しか年の差がない。それでも猶子という関係がありうるのであろうか。『榮花物語』巻十六「本の雲」には、源高明の子経房について、「年ごろ大殿の御子のやうに思ひきこえたまへりければ」云々とある。これは道長が経房を猶子としていたと理解することができようが、経房は安和二年（九六九）の生まれで、康保三年（九六六）生まれの道長とはわずか三歳しか違わないのである。他に、道長の猶子となつたことが明らかでない源成信にしても、天元二年（九七九）生まれで、道長より十歳の年少に過ぎないのである。もともと養育関係の有無には関わらない形式的な縁組であるから、年齢が近いことは全く差し支えないのであろう。

実子たる義孝は、伊尹の薨去に際して一年間の喪に服すことにな

るけれども、猶子である惟正は血縁者ではないから四十九日の忌が果てると籠っていた寺から出なければならぬというような定めがあつたのかどうかはわからない（喪葬令）では、父母の服忌が一年に対し養父母は五月とあるが、養育関係のない猶子の場合はこの規定があてはまらないのではないか）が、惟正が伊尹の猶子であつたことが想定されるならば、義孝が惟正とともに伊尹の死を悼み、悲しみを共有しているさまに納得がいくのである。ただ、どうして惟正が伊尹の猶子となつたのか、その理由はわからない。あえて言えば、惟正の父相職の叔母昭子が藤原忠平の室となつて師輔を産んだ、すなわち伊尹の祖母にあたるという関係が考えられようか。従四位下右大弁で終わった父を超えて、従三位参議となつて堂々と公卿に列したのは、惟正が一条摂政家と深い繋がりがあつた故であることは間違ひなからうと思う。

第一類系統本の傍注にある異文注記は、現存本のどれとも違つた情報をいろいろ与えてくれる。その信憑性は必ずしも明らかでないが、解釈上参考になる記事も多い。この部分などは特に重要な問題を含んだ異文であると言えよう。

#### 四 惟正の娘の結婚

『義孝集』にはもう一箇所、源惟正との贈答歌群がある。次のような三首の贈答である。

七月十日大天、修理のかみこれたゞ、わかなすびわかうりをこせせたり、

らい月さねすけの少将むこにとるべしときよてのころ  
みそのもりこたへだにせよつきたゞば かのこともみなりぬ  
べしとか（五五）

四日のよ、かへしあり

なにごともなるともなしにうりづらの 名にのみたゞむことの  
あやしさ（五六）

またかへし

あやもあれあやもなくまれのうりの かずならぬみようやは  
よのなか（五七）

修理大夫惟正が義孝のところへ若茄子と若瓜をよこしてきた。季節の味覚を贈つたのであろう。傍書によれば七月十四日のことである。茄子も瓜も夏のものだから、若茄子・若瓜と言つてもやや時季遅れの感はある。ちょうどその時、来月には惟正が実資の少将を婿に取ることになつてゐるという噂を聞いた頃だったので、御礼の代わりに義孝はその噂を気にする歌を贈つた。御園守よ、せめて答えておくれよ、来月になつたら例のことはみな成就するといふ話だが、どうなのかね。年頃の娘の保護者である惟正を神への供御のための果実や蔬菜類を育てる御園の番人に例え、娘と実資との結婚が成立する意の「成る」に果実が熟す意の「生る」を掛けて詠んだ。すると、惟正からは「四日のよ」に返歌があつた。何事も成就しはしないのに、まるで瓜の蔓が広がるように噂ばかりが世に広まるとは何とも妙なことです、と実資を婿に取るという噂を否定している。「四日のよ」

というのは、月が変わってからということのようだが、先の義孝の歌が七月十四日に詠まれたのだとすれば、その返歌が半月以上経って詠まれるというの間が抜けている。しかも、後述のごとく否定しながら実際には惟正は娘を実資と結婚させているのだから、月が変わってからの返歌では否定のしようがない。思うに「四日」は「翌日」の誤写ではないであろうか。

さて、惟正の返歌を受け取った義孝は、さらに返歌をする。やや難解な歌である。「あやもあれあやもなぐまれ」という表現は、あやがあるうとなかろうと、の意である。「あやなし」という言い方はあるが、「あやあり」という言い方はない。これは「あやなし」という語を承けて、そんなことはどうでもよいが、と突き放した口調で言ったものだろう。そうすると、惟正の歌の下の句「名にのみたゝむことにあやしき」の「あやしき」は、本来「あやなさ」とあるべきで、義孝はその言葉尻を捉えて、あやがあるうとなかろうと、そんなことはどうでもよい、と言ったのではなからうか。「あやしき」は実は「あやなさ」の誤写で、惟正は事実無根の噂ばかりが広まる理不尽さよ、と詠んだのである。しかし、義孝は惟正の噂の否定を信用してはいなかった。あやがあるうとなかろうと、噂はきつと事実のはずです、あなたから戴いた瓜の実ではありませんが、取るに足りない我が身であることよ、つらいではありませんか、世の中というものは。「よのなか」は男女の仲をさす。明らかに義孝は惟正の娘に恋情を抱いている。その気持ちが惟正に受け入れられず、実資を婿取り

することに決めたことに強い失望感をぶつけているのである。このように読み解くと、惟正の娘の結婚問題をめぐってのなかなか興味深いやりとりであることがわかる。

「さねすけの少将」とは、もちろん小野宮実資のことである。左大臣藤原実頼の子斉敏の男だが、祖父実頼の養子となった。天徳元年（九五七）生まれなので、義孝より三歳年少である。天禄四年（九七三）七月二十六日任右少将。以後、天元四年（九八一）二月十四日の藏人頭任官まで右少将の官にあった。同じ右少将で先輩であった義孝は天延二年（九七四）九月十六日に亡くなるので、この贈答が行われたのは天延二年七月のこととなる。義孝最晩年のことであるが、この年義孝は二十一歳、実資は十八歳であった。

義孝は（おそらく義兄弟の関係にあった）惟正の娘に恋心を抱き、妻にしたいと思っていた。惟正もそのことを知らないではなかったが、義孝はすでに源保光の娘を妻にしており、天禄三年（九七二）に一子行成を儲けていたので、義孝の妻にするよりは、まだ正妻のいない実資の妻とする方をよしとしたのであろう。実資を婿にすることに心を決め、それは世間の噂にもなっていたのに、義孝に向かつては否定し続けたのは、惟正なりに気を遣ったことなのか、あるいは日頃の気安さからとぼけてはぐらかさうとしたのかわからないが、結婚の事実が明らかになった時、義孝の失望は大きかったに違いない。

実資と惟正の娘との結婚に関する記録は残らないが、『小右記』



の記事から判断して、寛和元年(九八五)四月二十八日に女兒を産み、

翌二年五月八日に没した妻が惟正の娘であるらしい(桃裕行氏「忌

日考」『国民生活史研究』第五卷(昭37 吉川弘文館)、吉田早苗

氏「藤原実資の家族」『日本歴史』第三三〇号 昭50・11、鷺見等

曜氏「前近代日本家族の構造」(昭58 弘文堂)参照)。天延二年

の結婚だとすると、十二年間の結婚生活であった。実資は亡き妻を

悼み、懇ろに一週忌・三回忌の法要を行っている。以後、実資は寡

居し、「やもめにおはすれば、さべき女持たまへる殿ばらなど、気

色だちきこえたまへど、思す心あるべし、いかなることならんなど、

ゆかしげなり」(『栄花物語』卷三「さまさまのよろこび」という状

況であったが、おそらくは正暦五年(九九四)の秋、花山院の女御だ

った婉子女王と結婚する(『栄花物語』卷四「見果てぬ夢」・『公任

集』)。この時、藤原道信が失恋し、傷心のうちに没するという事

件があった(詳しくは、拙稿「道信中将の愛と死をめぐる憶説——

『公任集』の読解を中心に——」(『国文学』第一四三号 平6

・9)を参照されたい)。婉子女王も長徳四年(九九八)七月一三日

に結婚生活わずか四年で早世する。実資は惟正の娘と婉子女王以外

に妻を持たなかったというが、とかく結婚には三角関係がついてま

わったようである。道信の失恋は『大鏡』や『栄花物語』が伝えて

有名だが、それより先、惟正の娘との結婚の陰にも義孝の失恋があ

ったようだ。しかも、道信と同様、義孝も失恋の痛みが癒えないわ

ずか一箇月余り後に亡くなってしまうのである。実資はさぞかし夢

見が悪かったことだろう。

ところで、義孝の惟正の娘に対する恋慕の情が明らかになると、

先に考察した惟正邸に方違えした際の義孝と惟正との贈答も、単な

る恋愛歌めかした遊戯的な応酬ではなくて、義孝の惟正の娘への求

婚を背景に置いて読みたくなる。つまり、義孝が「つらからば人に

かたらむしきたへのまくらかはしてひとよねにきと」と詠んだ義孝

の歌は、娘への求婚に対して煮えきらない態度をとる惟正に対して、

いつまでもそんなに冷たく扱うなら、もう既成事実ができた世間

に吹聴しますよ、と脅迫めいた言い方をした。それに対して惟正は、

どうせあなたはほんの浮気心で関心をお持ちなのに、あたかも娘を

定まった妻にするかのごとくおっしゃっても信用できません、と義

孝の誠実さに不審をあらわにした答え方をしたのではないか。一見、

男同士で疑似恋愛を楽しむ遊戯的なやりとりに見えるこの贈答も、

このように詠むとなかなか実地的な二人の思惑がこめられた贈答で

あるように思える。義孝は、方違えを機会に惟正の娘との逢瀬を期

待していたのかも知れないし、ことによると、最初からそれが目的

で惟正邸に方違えをしたのかも知れない。それなのに惟正が差し出

したのは娘ではなくて枕だけだったものだから、義孝は枕の包み紙

に文句の一つも書き付けないではいられないなかつたのであろう。

さらに想像をたくましくすれば、惟正の返歌に納得できなかった

義孝は、娘本人の気持ちを確認するべく娘自身に返歌を求めた、そ

れが三番歌なのではないかとも思う。つまり、三番歌の詞書に「人

に」とあるのは、惟正の娘に対してではないかなどという気もしてくるのである。娘はきつぱりと、あらぬ噂なんか流されても浮気なあなたの心の程が人にしられるだけですわよ、とつっぱねた。こう読めば面白いが、詞書の書き方からしてちよつと無理であろうか。娘本人ではなくとも、娘の母たる惟正の妻であつた可能性はあるかも知れない。いづれにしても、冒頭のこの三首のやりとりは、決して深刻なものではなく、やはり気楽な遊戯めいた応酬であることは変わらないであろう。

### おわりに

少将藤原義孝と修理大夫源惟正との関係は、このように切つても切れない深いものであつた。義孝にとつて惟正という人は、単に父一条摂政伊尹家に入入りし庇護を受けていた家司のような人物ではなく、また、同じ右近衛府に勤める職場の上司でもなく、実は、父伊尹の猶子となつて、義孝には義理の兄と言うべき人物であつたようだ。父とほとんど年の差がないこの義兄は、義孝にとつて、もうひとりの父のごとく信頼でき、喜びや悲しみを共有し分かち合える存在であつたらう。そして、惟正の娘に恋心を抱いたことから、義孝は惟正を文字通り父と仰ごうとした。しかし、残念ながら、それは惟正の望むところではなく、二人が義理の父子となることはかなわなかつた。それにしても、父伊尹の葬去後、おそらく義孝には惟正がますます父のごとく思えたのでなからうか。

稲賀敬二先生は、『義孝集』の惟正関係の歌を読むと、「惟正と伊尹、惟正と義孝という人間関係が、世の常の親しさを遙かに越えるものだったという印象を読者に与える」ことを指摘され、「勅撰歌人でもない惟正関係の歌をこのように多く収めるというのは、この集と惟正との特別な関係を予想してよい」と言われて、惟正ないしその関連人物を『義孝集』の編纂者に想定する可能性を示唆された(前掲論文)。「義孝集」の編纂者として惟正がふさわしいかどうかは、なお慎重に検討を加えねばならないと思うが、『義孝集』において惟正の存在がそれほど重要であることは確かで、二十一年という短い生涯であつた義孝の伝記を考える際には、惟正との関係に注目することが非常に大きな意味を持つと思われるのである。本稿が、そのために少しでも役に立つところがあれば嬉しい。

——せのお・よしのぶ、広島大学文学部助教——